

私と記憶の関係性  
日本航空高等学校 通信制課程 阿部由依

記憶は、過去にとどまることをあまり好まない。  
人生には、坂道があり、曲がり角があり、時には引き返すこともある。あの時はこうなるはずだと思っていた場所に辿り着いていないことも多いし、むしろ思いもしなかったところに立っていることが多い。私はこれまで、そんなふうにならざるを得ず進路を変えながら生きてきた。だが不思議なことに、記憶は時間の流れに従って遠ざかるのではなく、ある日ふいに今の私のすぐそばに現れることがある。

三年ほど前、私の家の近所に広がっていた大きな畑が、市の土地開発によって姿を消すことになった。初めにその話を聞いたとき、私はどちらかといえば歓迎していたと思う。徒歩圏内に商業施設や大きな公園ができるらしいと知り、生活が便利になるなどと思い、ポジティブな変化だと疑いもしていなかった。

しかし工事が始まり、日を追うごとに景色が変わっていくにつれて、私の中に小さな違和感が溜まっていった。行き詰まったとき、気晴らしをするためによく歩いていた畑道が消えた。夏になると少し遠くにあるひまわり畑が眺められた跨線橋も、安全上の理由で封鎖された。最近まで当たり前だった風景が、何の相談もなく失われていく。それは、私が心の拠り所にしてきたものを静かに取りあげられたようだった。  
当時の私は、将来に明確な目標を持たず、惰性で日々を過ごしている自分に焦りを感じていた。変わっていく景色は、その焦りを容赦なく映し出す鏡のようで、背中を押されているというより、「早く変わらなさい」「あなたはまだここにいるの？」と後ろ指をさされながら世界が先へ進み、私だけがその場に残されていくような気がしてならなかった。

最近になって、その頃の自分の受け取り方を、少しだけ別の角度から考えるようになった。畑がなくなったことを、あれほど強く悲しんだのは、私の変化に弱かったからではない。あの頃の私は、日々の中で自分を保つために、目に見える安定を必死に掴んでいたのだと思う。  
将来について考えようとする、言葉がうまく形にならず、足元がぐらぐら揺れていた。そんなとき、毎回同じ道を歩き、変わらない輪郭を確かめることは、自分がまだここにいるという感覚を保つための、ささやかな抵抗だった。だからそれが失われたとき、私は必要以上に傷ついたのでなく、守っていたものを守れなくなったと感じたのだ。  
今振り返れば、あの否定的な感情は、ただ前に進めなかったが故ではなく、むしろ、自身が崩れないように踏ん張っていた証だったのだと思う。余裕のなさや苛立ちは、そのまま私らしく生きようとしていた形だった。そう考えられるようになって、当時の自分を、ようやく責めずにいられるようになった。

畑がなくなった出来事は、私を憂鬱にさせた記憶であることに変わりはない。ただ、その記憶への印象は時間とともに形を変えた。遠ざかるのではなく、むしろ距離を縮めて、今の私に別の意味を手渡してきた。過去の出来事そのものが書き換えられたわけではない。変わったのは、その記憶を受け取る私の立ち位置だった。

人生にはこれからも、坂道や曲がり角が現れるだろう。そのたびに迷い、立ち止まることもあると思う。  
そのときの私には、その時間が何を意味しているのか、まだ分からないかもしれない。それでも、その瞬間を生きている私の感覚や戸惑いが、いつか未来の私の記憶になったとき、何かに気づかせ支えてくれることを、私は信じている。  
そう思いながら、今日も私は、まだ見えない先へ歩いていく。